

上つ毛野安蘇の真麻むらかき抱き寝れど飽かぬをあどか我がせむ

【語釈】

*上つ毛野：ここは「上野の」ではない。上野・下野と二国に分かれる以前は、合わせて毛野の国と称した。古代の東山道のはてにある国で、都に近い方が「上つ毛野」。

*安蘇：上野国と接する下野国（今の栃木県）には阿蘇郡があった。巻十四・3425に「下つ毛野安蘇の川原」とある。しかしまた、上野国の安蘇は354番にも「上つ毛野安蘇山」とあるので、上野国と下野国とにまたがる地名と考えられている。今の前橋市の東方。

*真麻むら：「ま」は誉め称える意の接頭語。「麻むら」については、刈り取った麻を束ねた状態とか、密集して植えてある麻の畑のことで、人の背丈以上に成長した麻を抱くようにして抜き取って収穫するので「かき抱き」と続くのだとの解釈がある（麻の収穫は刈り取るのではなく根から引き抜くという―「夏麻引く」3381―伊藤・釈注はこの説を支持する）。また、土屋・私注はこれらを否定して、「ムラは麻の繊維の「かたまり」を指し、繊維を績（う）む意味から次のムダキのム（ウと近い音）に続けた序であるとする。つまり、実際に麻を抱くのではなく、「抱く」という言葉を引き出すための序だという。

*かき抱き：「かき」は接頭語。「かき抱き」で、自分に引き寄せて抱く意。

*あどか：などか、の東国方言。「あどか我がせむ」で、私はこれ以上なんとしようぞ、といった意味。自分自身を持て余すような気持ちを表わす。

【総釈】

この歌は「ま麻むらかき抱き」の意味をどうとるかで読み方が変わってくる。その前からの「上つ毛野安蘇のま麻むら」という続き方については、他の例が次のように、

下つ毛野安蘇の川原 (3425) ↓下つ毛野安蘇の十川原

上つ毛野安蘇山蔓 (3434) ↓上つ毛野安蘇十山蔓

自然界の景物に続いていることから、「ま麻むら」は麻畑を表わしていると思われる。「かき抱き」については、生えている麻を抱きかかえるようにして抜き取る収穫の様子をいうのだという解釈もあるが、一般的には、刈り取った麻を掻き集めて束にし、抱きかかえて運ぶときの様子を言っていると解釈するのがいいのではないだろうか。

ちなみに、上野国ではないが、『倭名類聚鈔』には下野国の安蘇郡には「麻統」（読み方不明）という古い地名もあつて、安蘇郡が麻の特産地だったようである。おそらく調（税の一種）として朝廷に納める麻布の材料としても栽培されたのであろう。

さて、この歌は麻の収穫作業から「かき抱き寝れど」と男女の性愛の行為へと続け、相手が可愛くて可愛くてならぬといった心情を歌っている。とくに「かき抱き」という、相手の体を引き寄せて強く抱きしめるさまが、麻をかき寄せ、束にして抱きかかえて運ぶ様子に喩えられて、うまく表現されている。このような表現は、麻の刈り取り作業の

経験から生み出されたもので、この歌が好まれたのは、具体的な労働の状況をうまく恋歌の表現に転用し結びつけたからであつた。中西・文庫が「麻を収穫する時の労働歌」とする通りである。

この歌は必ずしも男の立場の歌として読まなくともよい。労働歌であるがゆえに、娘たちが、大好きになれる男を得たいものだ、と想像しながら歌つても楽しい歌になるだろう。麻は収穫後、乾燥させて、水に浸し、皮を剥ぎ（皮を剥いだ棒をオガラ＝苧殻（をがら）という）、さらに繊維を取りだして麻糸を紡ぐ。これらの一連の作業は女性の労働だったとする見方もある。糸を紡いだ後の機織りも女の仕事であつた。夏の麻畑での作業は土埃にまみれながらの労働であつたらう。

まったくの余談だが、何人かで作業をしていたと想像すると、この歌に対して別の娘が茶化するような歌をうたつたこともあつただらう。たとえば、残念ながら言い寄ってきたのは「筑波山の蝦蟇男」だったのさ、などといった歌を續けて、みんなで大笑いする。そんな情景を想像して読んでもおもしろい。

もちろん男の立場の歌としても読める。沢瀉・注釈は「素朴、端的で、民謡としての面目を遺憾なく發揮したものである」とし、「男をしてかうした歌を歌はせる事が出来たら女人冥加がありと云へようか」と評する。まじめにとれば、これは熱烈な恋の歌でもある。しかし、独身の男が麻の束を抱きながらこのような歌をうたつても、戯笑歌として通用する。

この歌、次のように同じ音が繰り返されている。

かみつけのーあそーあかぬーあどかーあがせむ むらーむだきーせむ
(ア音が四つ、カ音が四つ、ム音が三つ) あそーまそ

なんとなく響きがいいのは、このためである。文字で書き留められる前に、人々によくうたわれ、伝承されてきた歌であらう。

▽類歌との比較

同じく東歌に国不明の相聞歌として次の類歌がある。

3465 高麗錦紐解き放けて寝るが上にあどせろとかもあやに愛しき

(国不明の東歌、相聞)

* 高麗錦…朝鮮から舶来した上等の錦の織物。多胡付近には渡来人もいたらしい。

「紐」にかかる枕詞。

* あどせろ…何としろ。右の「あどか我がせむ」は自分のことをいうが、これは他人の側に立って「(この上に) どうしろというのか」とうたう。

* あやに…無性に、とつても。

右は、東国方言「あどせろ」などがあつて東歌らしいけれども、地名が詠み込まれていないし、土地の生活を思わせる表現もない。その代わりに「高麗錦」という貴族好みの高級な織物が詠まれていて上品な表現になっている。後半部の共通性を考えると、これは3404番をもとにした歌ではないかと思われるが、もとの歌にはとても及ばない。

※万葉集の歌には、集団の中の笑いを感じさせる歌が結構ある。その笑いをとらえてこそ、はじめて万葉びとの心にふれることができるだろう。